

フランス最古の喜劇

進藤, 誠一

<https://doi.org/10.15017/2332981>

出版情報 : 文學研究. 36, pp.169-182, 1948-03-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

フランス最古の喜劇

進藤誠 一

フランス喜劇の淵源はあきらかでない。カペー王朝（九八七——一三二八）の初期からジョン・グルールという吟遊詩人が存在して、シャンソン・ド・ジュスト、即ち武勳の歌を朗吟して國內を巡歴したものであるが、かれらはそうした眞面目な演題のほかに、滑稽や諷刺をむねとする演題をも有つていたといふことは、大いにあり得ることである。そしてまた、これらの滑稽物のなかには對話體で作られたものもあつた、と推定することも可能である。併しこの時代の滑稽的演劇については、どのような斷片も傳つていない。それゆゑフランスにおける喜劇役者の歴史は、ジョン・グルールによつて開かれたと言ひ得るにしても、喜劇の歴史はそれよりもずつと降つて十三世紀の中葉に及んで、はじめて文献をもちはじめるのである。

フランスに於ける最も古い滑稽的演劇として現存するものは、アダン・ド・ラ・アール Adan de la Halle の『アダンの芝居、または青葉棚の芝居』 *Le jeu d'Adam, ou de la Feuillée* である。

アダンはアラス（今日のバ・ド・カレー縣にあり、その昔のアルトワ州の首都であつた）に生れた。この町は詩人ジャン・ボデルをも生んでゐるが、中世に於て商工業のさかんな、従つて富裕で文化生活の進んだ都市であつた。

アダンの生れた年はたしかではないが一二三〇年頃と推定されている。かれの同時代人はかれのことを屢々「せむしのアダン」とか、「アラスのせむし」とか呼んでいる。アダン自身は、「人は私のことをせむしと呼ぶが、私はちつともせむしではない」と書いている。せむしでない者をなぜせむしとあだ名したか、その理由については今日あきらかでない。

かれは學僧 (clerc) としてアラス近傍のヴァーセルの僧院 (Trabbaye de Vaucelles) で學問の修業をした。多分僧職につく目的であつたのであろう。ところが修業なかばにしてかれはマリーと呼ぶ若い女性に熱烈に戀して、僧院を去つてかの女と結婚してしまつた。

その後、中年の頃、アラスの町に起つた紛擾をさけて、一時家族とともに他所へ移つていたことがある。

その後、カペー朝の王フィリップ三世 (豪膽王) の従兄弟にあたる、アルトワの太守ロベール二世に、お抱え詩人として仕えた。そしてこの主君が王の命によつてイタリアのナポリに赴いた時、アダンはその供をした。ロベールがイタリアに行つたのは、かれやフィリップ三世の叔父にあたるアンジュー公シャルル (ルイ聖王の弟) が有名なヘシチリアの晩禱 (Les Vepres siciliennes) と呼ばれるイタリア人の反亂によつてナポリの町を失いそうになつたので、その救援のためであつた。ロベールは叔父の歿後、攝政となり (一二八四)、ナポリに留まつた。アダンもひきつづいてこの町に留まつていたが、ついにそこで歿した。歿年についてはたしかでないが、一二八八年より前であつたことはたしかである。それはアダンの甥ジャン・マドール (Jean Mados) が一二八八年に書いたものに、伯父のことを故人として書いてあるからである。

『アダンの芝居』は一六二二年頃、アラスにおいて作られたものと推定される。それは後に記すように、この戯曲の中で語られている歴史的事實の年代から推定されるのである。

登場人物は總數十八名である。

アダ
ン

アン
リ

アラスの町の五人の町人

醫
師

流浪の修道僧

一人の婦人

一人の狂人

狂人の父親

酒店の主人

庶
民

魔女モルグ

同 マグロール

同 アルシール

全篇約一千行ほどの詩句からなり、各詩句は十二音綴から成る。勿論幕の區分や、景の區分は無い。
先づアダンが口を開く。

へ皆さん、なぜ私が着物を着かえたか御存じですか？ 私は今まで妻とくらししてきましたが、今日以後、學僧の身分にもどります。私はこれで前かたからあこがれていた生活にかえるのです。しかしその前に、皆さんにお別れをしたいと思うのです。さあ、これでもう、私の御懇意に願つていた人たちは、私がパリに行くといつていたのはでたらめだつたとは仰有らないでせう。人というものはどんなに心を奪われていても、いつかはもとに戻る事ができるものです。大病を患つたあとにはすばらしい健康が來るものです……」

このようにアダンは妻を捨て、アラスの町を捨ててパリに行き、りつばな學者になる決心をしたことを一座の人々に告げる。

しかし友人たちは口々にアダンの思いたちを諫止しようとする。かれが妻を残して行こうとしていることが特に非難の的となる。一旦神聖な教會によつて一對の男女が結び合された上は、もとにもどすことは許されない。結婚するまえによく考えるべきであつたのだ。

この非難に對してアダンは若かりし日の過ちを述懐する。

へ誰が結婚の前に用心をするでせう？ 愛の神が私を虜にしたのは、ちようど戀人がそれに反抗すれば二倍も身を苦しめられるあの瞬間だつたのです。ちようど始めて血潮の煮えたぎつた時に、まさに木の芽のもえたつ季節に、

青春の熱狂のさなかに、萬物が最もよい味をもつ時節に、私は捕えられたのです。そんな時に、人は自分の欲望にかなうものよりほか、どんな利益もかえりみはしません。時は美しい夏で、大氣はすみ、心もちよく、新緑はもえて、心も浮きたつ頃でした。小鳥の聲はうつとりするようでした。私は高い森の中で、七寶のような小砂利の上を流れる泉のほとりで、一つのまぼろしに出あつたのです。そのまぼろしの本尊は、いま私の妻になつてゐる、そして色あせて黄色つぼくなつてゐる女なのでした。しかしその時のかの女は何と白く、ばら色で、ものやわらかで、笑みこぼれて、情愛深く見えたこととせう！ 今のかの女はでぶでぶして、不かつこうで、陰氣で、怒りつぽい女ですが

これを聞いた町人リキエはアダンの移り氣を攻撃し、細君があまり愛情を安賣りしたのがいけなかつたのだとの見解をのべる。アダンは、いや、戀愛が人の眼をくらますのだ。戀愛が女性の魅力の一つ一つに非常に大きな輝きを興えるので、宿無し女でも女王のように見えるのだ、と言つて、自分の妻の容貌が昔は美しく見えたのが、今はうつて變つて平凡で、魅力をもつていないことを長々と述べたてる。そして妻は私がかの女を深く愛していることを知ると、私に對して高慢な態度をとつた。かの女が高慢になればなるほど、私の戀情と愛欲と情念とはいつそう大きくなつた。そこへ嫉妬と絶望と歡喜とが加わつた。戀はますます燃えさかつた。そして自制心をまつたく失つてしまつた。そして學僧の身分をすてて夫の身分になるまで私の心は安まらなかつた、と述懐し、さらに續けて言う。

さて皆さん、私はこのように愛に眼を眩まされて、その虜になつたのです。というのは、愛によつてそんなに美しく見せられたかの女の容色は、實際はそれほど美しくはなかつたのです。私がヴォーセルから出て來たとき、愛

欲が私の口の中に水をわかしたのです。それですから、妻が妊娠などして問題がこれ以上めんどうにならないさきに、私は自分の眼を開く方がいいのです。私の餓えはもう充たされたのですから。》

さてアダンの父アンリもその場に居たのであるが、かれは伴のこの決心に賛意を表する。

《あゝ、私の優しい息子よ、女房のために年月をむだにし、いたずらにこの土地にぐずついていたお前は何とかわいそうなものだったことか！ お前の決心は賢明だ、出かけるがよい。》

しかし町人ギョーが、《それでは伴さんに金をおやりなさい。無一文ではバリで暮すことはできませんよ》と言うと、親爺さんはたちまち顔色を變えて、《やれやれ、そんな金がどこにあるう？ 私は二十九リールよりもつていない。息子よ、お前は巧者な人間だ、何とか自活の方法を考えるがよい。私は老いぼれだ。咳は出るし、病氣だらけだし、疲れはてている》と泣きごとをならべる。

これを聞いた一人の醫者は笑いながら言う。《あなたの病氣はよくわかつています。それは吝嗇という病氣です。》そして醫者はおも續けて、《あなたと同じ病氣にかかつている人を私は澤山知つています。アラスだけでも二千人以上います》と言つて、數人の市民の名を列挙する。

アンリは醫者にむかい、私は腹がはつて苦しんでいるのだが、何の病氣でせう、と診察をもとめる。醫者はアンリが持ち出した尿を検べて、あなたは聖レオナル病だ、と診断する。（聖レオナル病とは妊娠その他、腹の脹れる病氣のことである。産婦の苦痛を救うためにこの聖者の加護を祈る習慣があつた。）

この時一人の女がやつて来て、腹のふくれたことについて醫者の診断をもとめる。醫者は妊娠と診断し、父親は誰

かと訊問する。女はそんな覚えはないと言いはるが、ついに包みきれず、この場にゐる町人リキエだと白状する。これがきつかけとなつて、かなり卑猥な冗談が連發する。次いでアラスの町の女房連の悪口となり、澤山の名前があげられる。

この話が一段落となつた時、一人の旅の僧が聖アケールの遺物をささげて登場する。僧は聖者の功德をならべたて、一同にお賽錢をあげて願ひごとをするようにすすめる。この聖者の功力の第一は、悪魔を人間のからだから追い出すことであり、狂氣をなおす力に顯著であるという。

そこで狂人や白痴が次々にやつて來て、賽錢や供物をして、遺物に接吻する。かれらのとりとめの無い謔語が人々を笑わせる。人々はかれらの言葉の種類にして洒落や冗談を言いあう。そのなかに一つ注意に値する話題がある。狂人が重婚という言葉をおぼしたことから、ローマ法王アレクサンドル四世が、學僧が寡婦と結婚することを禁止した法令が問題となり、アンリが法王攻撃をする件りである。人々の言葉から、この法王が最近に他界したことが知られる。ところでアレクサンドル四世は一二六一年五月二十五日に歿している。この事實から推して、この戯曲がほぼ一二六二年頃に書かれたものと想定されるのである。

さて旅僧の遺物の騒ぎが一段落すると、次は仙女の來訪となる。毎年、この夜、仙女モルグがその仲間の仙女たちとともに、アラスの町人たちの設ける饗宴にやつて來て、青葉の木蔭で御馳走になるのが恒例であつた。今夜がちょうどその日にあたつているのだが、なぜか仙女たちは姿を見せない。それは多分旅僧の遺物の力が仙女たちを近よせないのであらう。そこで人々は旅僧と遺物とを物陰にかくしてしまふ。はたせるかな、やがて鐘の音が盛んに聞

え、魔王エルキヤンの家來たちの通過が知られる。魔王の使者クロックソは主人の戀の使として仙女モルグに面會するためこの場に到着する。待つ間ほどなく仙女モルグが二人の仙女をひきつれて登場する。かの女はクロックソに挨拶し、かれを着座させたのち、アルシールとマグロールとの二人の仙女にそれぞれ座につくようにすすめる。ところがマグロールの座には敷物の用意が無かつた。そのためこの仙女はすっかり機嫌を損じてしまつた。モルグはマグロールの怒りをなだめようとし、この饗宴の席が非常に美しく、氣持ちよく作られていることをほめそやす。アルシールも調子を合せて、このような宴席をしつらえてくれた者には、好い贈物をおくるべきだ、と言う。いつたいそれは誰なんだろう？ とモルグがたずねる。クロックソがそれに答えて、私が見たところでは、二人の學僧が食卓の用意をしていました。それはアダンとリキエでした、と教える。モルグはそれを聞くと、ではリキエは金持ちになるであろう。またアダンは世界中で一番愛情の深い男になるであろう、と贈物を豫約する。アルシールはまた、リキエには商品が好都合に、豊富に手に入るであろう。またアダンは陽氣な、上手な歌作りになるであろう、と贈物をする。しかし不機嫌なマグロールは、リキエはげ頭になるであろう。またアダンはパリに行くと言つているが、かれはアラスの仲間からはなれることはできないであろう。またかれは妻のやさしい腕の中に茫然としてわれを忘れ、勉學の熱も失い、旅行を思いとまるであろう、と豫告する。

さてモルグはクロックソの方にむかい、その用向きをたずねる。クロックソは主人エルキヤンからモルグに宛てた戀文をさし出す。しかしモルグの心はほかにひかれていた。かの女は、わたしはこの町に住むロベール・スメイヨンという若い男を戀しているのだからエルキヤンがいくら口説いてもだめだ、歸つて主人にそう言いなさい、と答える。そ

してかの女はロベールの武勇と才幹とをほめあげる。しかしアルシールはこれを聞くと、あのロベールという男はたいへんな嘘つきで、どこへ行つてもすぐに女を拵えようとする浮氣者だ、とモルグの戀人の行狀をおぼく、モルグは始めて愛する男の裏切りを知り、熱がさめると同時に、エルキャンにつれなくしたことを後悔する。へわたしは魔法の國で一番えらい王様を袖にしていたとかの女は述懐する。そしてクロックツにむかい、よろしく主人にとりなしてくるよう依頼する。クロックツも喜んで禮をいう。

この時クロックツは、へあの車輪の中にいるものは何ですか？ 人間ですか？とモルグにたずねる。かの女は答えて、あの車をもっているのは「運命」といつて、生れつきつんぼで、啞で、めくらである。わたしたちはみんなあの女に支配されているのだ。かの女はすべてのものに普遍であり、世界をその手に握つている。一人の人間を、今日は貧乏にして、明日は金持ちにすることができる。しかもかの女は誰をひいきしているのか知らないのだ。人はどんな高い地位にのぼつていても、「運命」をあてにしてはいけない。車輪が廻ればどうしても落ちなければならぬからだ、と説明する。車輪の上の方に二人の人間がいる。へあれは誰ですか？とクロックツがたずねる。モルグはその人たちの名を言うことをためらう。しかし飽くまでつむじを曲げているマグロールは無遠慮にその人たちの名を言つてしまふ。それはこの町の有名な守銭奴たちであつた。車輪の各所にとまつている人々についても、マグロールは一々名を言つて人物批評を行うのであつた。

とかくするうち夜あけ近くになつた。仙女たちはそれに氣づくとも早々にこの場をひきあげて行く。これで仙女の場面は一段落となる。

仙女たちの出現していたあいだ、片隅で居眠りをしていた旅僧が眼をさます。そして藥屋のアーヌに、何か腹ごしらえをして出發したいと言う、そこで兩人は近くの酒亭に行く。そこにはリキエやギヨールがすでに卓についている。人々は酒亭の主人を相手に酒の品定めをする。折からアダンとその父アンリとが表を通りかかる、アダンは父親の手前、酒亭に入ることを遠慮するが、結局父子ともに客人の仲間入りをする。アダンのバリ行きがまたしても擲揄される。旅僧がまたしても眠りこむ。人々は旅僧を弄りものにすることを思いつき、アーヌがかれの代りに賭博をして負けたと偽つて、酒代をかれに拂わせようと申し合せる。僧は眼をさましてこのことを聞き、不承知を申し立てる。亭主はそれでは出發させないとおどす。僧はしかた無く、聖アケールの遺物を抵當に置く。そこで亭主は遺物をかかえて、へさあ、これで私は説教ができるぞ」といつて、人々に大いに飲んでふざけることをすすめる説教をする。人々は酔つて歌をうたう。先刻の醫者がやつて来て、そんなに飲むと死んでしまうぞ、さうでなければ中風だ、とおどしておいて、さてわしにも一杯飲ませる、と仲間入りをする。白痴の親子がまたやつて来る。白痴は謔言をわめき、あばれまわるので、人々は酒瓶や卓布をかたずける。旅僧は、《お前はわしに迷惑ばかりかける》と言つて父親を叱る。

最後に僧は十二スールの金を出して遺物を取りかえし、またとこんな所には來ないぞ、と毒ずきながら出て行く。人々もそれぞれ家へ歸つて行く。これで『アダンの芝居』は終るのである。

これはまことに奇妙な戯曲である。まづ第一に奇妙なのは登場人物の殆んどすべてが實在の人物であることである。實在の人物を俳優が演ずることは、演劇において必ずしも珍らしいことではないが、ここでは實在の人物がその

まま劇中でその人物を演じているのである。作者アダンはアラスの町人の數人を劇中に登場させて、その人たちの性癖や行状をかなり手きびしく、かなり道化的に揶揄している。かれは自分の父親さえも假借せず、その吝嗇をからかっている。かれの妻は登場しないが、かれの毒舌によつて欠點を吹聴されている。他人のことばかりではない、作者自身がまつさきに槍玉にあげられている。かれは熱烈な戀愛のうちに結婚した妻を、まだ幾年も経たぬうちに捨てて、一人でパリに旅だとうとする。しかもその言いぶんは、自分はもう満腹したから、子どものできないうちに妻と別れたほうが賢明だ、というのである。

從來の學者のなかには、アダンのこの言葉をとりあげて、かれの性格を非難しているものがあるが、それはあまりに單純な、文學のわからぬ考えかたである。仲のよい友だちが集つて、おたがいの缺點を誇張して言いあうことがあつた。この戯曲はそれと似た意味をもつている。そして作者の悪口は作者自身で言はねばならないので、アダン自身の境遇を土臺として、自分を利己的な、輕薄な男として誇張して表現したのである。かれのパリ行きの念願が仙女マグロールの意地悪の呪咀によつて打ちこわされるという筋の運びにも、作者の意圖がうかがわれるのであつて、アダンには本心からパリに行くつもりではないのである。ただパリ行きはかれの夢想であつたことは推察されるのである。同時に、モルグとアルシルとの好意的な豫言によつて、世界で一番愛情の深い男となり、上手な歌作りになるという件りは、自嘲と己惚れとを含めたもので、親しい友だちのなかでは、よく見られる心境である。

こうした特徴から推量すると、この劇は一般の觀衆の前で演じられたものではなくて、特定の、限られた人々の集會で演じられたものではなからうかと考えられる。この點につき、プティ・ド・ジュールヴィルはその著、『中世フラ

ンスの喜劇と風俗』の中で次のように言っている。『アダンの芝居はどこかのピュイで、多分アラスのピュイで演じられたものと考えられる可き根拠がある。中世におけるピュイがどんなものであつたか、改めて言う必要は無いであらう。なかば宗教的な、なかば俗界的な文學アカデミーがピュイであつた。アラスのピュイにおいては俗界的性格が支配的であつた。それはこの地の出身のトルーヴェールであつたヴィラン・ダラスの書いたものに、戀愛と、歡喜と、若さとを保つために、このピュイが設けられた……』という意味のことがあるのを見ても推量されるのである。ピュイにおける演劇は公開されなかつたものと思はれる。ことに『アダンの芝居』のような性格のものが公開されたとは考えられない。劇中の人物表現があまりになまなましく、あまりに直接的である。最も大膽なファルスでもこれほど露骨ではない。ファルスは一つの町で知名の、尊敬されている二十人の人物の本名を出しはしない。また作者自身や、その父親や、その妻を劇中の人物にすることもしない。『アダンの芝居』は友人、同業者のあいだで、アダんとその仲間たちによつて、多數であつたかも知れぬが、選ばれた観衆の前で演じられたものにちがいないと思はれる。現在、ある種の團體で行はれるなかば私的の、なかば公開的の、そしてほとんど常に尖端的な演劇こそ、『アダンの芝居』が十三世紀に演じられた様子を最もよく示唆しているものであらう。』

以上のプティ・ド・ジュールヴィルの推定には私もまづたく同感である。

かように取材がはなはだしく卑近で、直接的であり、諷刺が露骨でなまなましいことはこの戯曲の第一の、最大の特色であるが、さらに、かような寫實的な、卑俗な場面と場稱とのあいだに、平然としてお伽劇をはさんでいることも、非常にめずらしいことである。

この戯曲はあきらかに三部にわけられる。第一部と第三部とはアダンを中心とする親しい仲間の、日常生活的な、樂屋落ちな冗談や皮肉や悪口に終始しているが、第二部は純然たるお伽劇である。そしてこの部においては、第一部と第三部とに活躍する町人やその他の人物はすっかり姿を消し、三人の仙女と魔王の使者とがもつぱら活躍している。思うに作者は戯曲の構成とか、格調とか、ジャンルの區別とか、「そういつた問題を考慮してはいないのである。この點については、アダンと同時代にアラスの有名な詩人であつたジャン・ポデルの『聖ニコラの芝居』も同様であつた。この宗教劇においても、嚴肅な宗教的場面と、卑俗な酒場の場面とが交錯して奇異な印象を與えているのである。そして二つの酒場の場面には類似の點が多々あつて、興味深いものがある。『アダンの芝居』と『聖ニコラの芝居』とどちらがさきに書かれたものか、今のところたしかめることはできないが、二人の作者に一種共通の作劇術が見られるのは興味の深いものがある。

中世演劇史家たちは、『アダンの芝居』をギリシアの舊喜劇、即ちアリストフ、ネスの作品と比較對照して、その類似を指摘している。即ち實在人物の諷刺嘲罵の辛辣さ、用語の大膽さとそのなまなましさ、超自然的事件を好んでとり入れること、戯曲の進行に一つの構成というものが無く、作者の空想と思いつきによつて奔放自由に筋をはこんでいること。以上の諸點は、ギリシアの舊喜劇の特徴であるが、同時に『アダンの芝居』にもそのままてはまる特徴である。例えばアリストフ、ネスの『蛙』においては、神話の人物であるバッキュスがヘラクレスの姿に假装して、地獄に行き、そこでエウリピデスとエスキロスとが悲劇の王座を争うのを見るといふ筋であるが、作者は露骨にエウリピデスの人身攻撃を行い、その作品を非難している。また臆病なバッキュスはヘラクレスに化けてもやはり臆病

であつて、その従者とともに数々の道化的場面を演ずるのである。思うにアリストファネスの喜劇の思想はアダンのものとは格段の高さをもつているのであるが、この比例を除いてみれば、兩者の類似は實際顯著なものがある。

私たちはまた『アダンの芝居』が近代のルヴューに似ていることに気がつくのである。ルヴューとは検閲の意であるが、年の終りに一年間に起つた主要なできごとをとりあげて検討し、諷刺、揶揄するのが劇においてルヴューと稱するものである。これはその性質上短篇劇の連続であり、風俗諷刺もあり、輿論の表明もあり、醜聞のパロディもある。そして全般に一貫する偶意というものは存在しないのが普通である。また最近の出来事だけを問題にするのであるから、自然その描寫は露骨であり、直接的である。またルヴューは本質的に際物であつて、その生命はきわめて短いのである。このようなルヴューの特色が『アダンの芝居』に見られるのである。『アダンの芝居』には作意とみられるものは無い。これというや、まも無いし、破局というものもない。日常茶飯事の描寫と諷刺にすぎない。それらの描寫と諷刺とは當時のアラスの住人たち、ことにアダンの親しい交友たちには非常におもしろく、痛快であつたに違いない。しかし他の町の人たちにとつては、その興味はいちじるしく減つてしまつたにちがいない。またこの戯曲が書かれて三年のち、五年のちにはその諷刺性の大半は意味を失つたにちがいない。それはルヴューの場合と同様である。すべてあまりに直接的な、あまりに個人的な人物描寫をふくむ作品はそれだけ客観性がすくなく、永續性に乏しいものである。しかし今日われわれが『アダンの芝居』に對していだけ興味はまた別種のものである。時代おくれということは今では問題にならない。十三世紀の作家の作劇術がどんなものであつたか、當時の觀衆の嗜好がどんなものであつたか、それが現代のわれわれのものとどれだけちがつているか、またそれが現代までにどのような過程によつて進化してきたか、それらの問題こそ『アダンの芝居』がわれわれに與える最も大きな興味なのである。